

近世ドイツ宗教改革運動における 民衆教化文書の社会語用論的考察*

新 田 春 夫

1. 社会語用論

まず最初にここでの考察において方法論的な基礎とする社会語用論とは何かについて述べる。

1. 1 言語システム

言語はひとつの体系、システムである。しかし、日本語やドイツ語などの個別言語は単一のシステムから成り立っているわけではなく、複合的システムを成している。例えば「ドイツ語」と言っても、方言などの地域的な違いが見られる。また、かつては王侯貴族や農民などの社会層によって言葉はかなり異なっていた。あるいは、軍人語、学生語など、職業、身分などの社会的集団によっても違いがある。さらには、話し言葉と書き言葉は音声と文字といった媒体の性質が異なるために両者の間におのずと差違が生じる。これらの違いは一つのシステムの部分的な変異と考えることもできるが、先に述べたように、言語はシステムであり、部分は全体との関係において初めて意味を持つのであるから、個別言語の中の地域、階層・集団、媒体などによって異なった言葉はシステムとしてそれぞれ別物

* 科学研究費助成金基盤研究 (C) による研究成果の一部である。

であると言える。

個別言語を構成している個々の部分的システムは言語変種と呼ばれる。ひとつの言語におけるさまざまな言語変種は全体としてドイツ語ならドイツ語と呼ばれる個別言語を構成している。従って、いわゆる「ドイツ語」はひとつの抽象的概念である。

例えば、方言を例にとると、方言は村や町ごとに異なる。それらは地域ごとにまとめてその地域の地域的方言を形成し、他の地域的方言とは区別される。さらに、これらの地域的方言はそれより大きな単位である地方的な方言にまとめることができる、等々、次々に抽象化することができる。比喩的に言えば、より具体的な方言の集まりを下層とするならば、それらの方言をまとめて抽象化した地域的方言がその上に位置し、さらにその上にそれらの地域的方言をまとめてより抽象化した地方的方言が位置する、など階層的、ピラミッド状に全体としてひとつの個別言語を構成している。

上では方言を空間的、共時的に見たが、歴史的、通時的に見れば、方言は社会の地域的、階層的流動化の進展に伴い、地域的な差違を残しつつも徐々に混淆し、平均化されて、通用範囲が拡大し、共通語が形成されてきた。ただし、その場合、個々の方言は必ずしも対等ではなく、文化的、経済・政治的に優勢な地方の方言が他の地方の方言を駆逐して、その通用範囲を広げることもある。ただし、その場合でも他の劣勢な方言とのなんらかの混淆が起こることもありうる。また、時代によって文化的、経済・政治的に優勢な地方の方言が交代することもある。このように、方言の平均化、共通語化はきわめて複雑なプロセスをたどる。これは、言語によって平均化、共通語化のプロセスの中身は異なるが、どの個別言語にも見られる現象である。

しかし、日本語でもドイツ語でも話し言葉のレベルでは今日でもなお地域的な差違は残っている。話し言葉における全国的な共通語はラジオ・テレビのアナウンサーなどの言葉に限られる。しかし、これは自然発生的なものでなく、放送協会などで協議し、統一するという形で、人工的に作り上げられた言語である。これは規範的な言語としての標準語と言える。また、これは学校教育などで教えら

れ、広められるが、それによって共通語が標準語に近づいて行く。

書き言葉は本来、話し言葉を文字によって記録したものである。しかし、音声と文字という媒体の性質が異なることによって、書き言葉は話し言葉とは異なった独自の発達を遂げ、文章語として異なったシステムを構成している。

また、音声はすぐに消滅し、(今日ではラジオ・テレビ網や録音技術などの発達によって事情はやや違ってきているが)その伝達範囲も狭いのに対し、文字は情報を長く留めることができ、文書化されたものは伝達範囲もはるかに広い。従って、共通語化も話し言葉よりも速く進行する。日本語でもドイツ語でも書き言葉の全国的な共通語化の方が話し言葉の共通語化よりも程度が高い。また、現在では公的な機関によって書き言葉の文法や語彙が定められ、規範的言語としての標準語を想定できるところまで達していると言える。ただし、書き言葉も話し言葉と同様に、地方的な差違をもった日常語のレベルから全国的な共通語としての文章語、最後に、規範的な人工語としての標準語に至るまで、その共通語化の度合いに応じて、比喩的な意味でのピラミッド状の構成をしていると考えることができる。また、書き言葉の共通語化のプロセスも、話し言葉の場合と同様に、文化的、経済・政治的に優勢な地方の書き言葉が規範的な文章語として他の地方の文章語を駆逐したり、あるいはそれらと部分的に混淆したり、また、地方的な規範的文章語が交代するなど、きわめて複雑である¹⁾。

以上のように、言語は複合的なシステムであり、そこにおける言語変種としてのさまざまな部分的システムは比喩的な意味での階層を成しており、また、それらは時間とともに変化するきわめてダイナミックで複雑なシステムである。

1. 2 言語と社会

人は母語となる言語を両親から習い始め、生活圏の拡大とともに徐々に言語の習得環境が広がって行く。言語の習得環境は地域、階層、媒体などの点で人によってさまざまであるし、その人の成長によって変化する。また、両親などとの

1) Mattheier (2001: 351-363), Besch/Wolf (2009: 107-114) を参照。

世代的な違いも生じる。他方、地域、社会層、媒体などの社会の言語習得環境も時とともに変化していく。このように、言語と社会は密接な関係にあり、社会的環境の変化が世代間の言語的差違を生み出し、それが複合的システムとしての言語の歴史的变化をもたらすと考えられる²⁾。

1. 3 社会語用論

一般言語学や個別言語学は言語一般や個別言語の体系、システムを分析し、記述する学問分野である。他方、それとは異なって社会言語学はシステムとしての言語と社会との関わりを分析し、記述する言語学の一分野である。

言語はコミュニケーションのための道具、手段である。語用論（言語的実用論）は、人が言語をどのような目的でどのように戦略的に使用するかという観点から言語によるコミュニケーションを分析する分野である。語用論の分析対象はふつう、コミュニケーションのさまざまな具体的場面での言語使用である。

社会語用論は、人がその社会的活動にあたって言語をどのように使用するかを分析する学問分野であると定義することができる³⁾。ここでの社会語用論は、近世ドイツにおいてキリスト教の立場から庶民を教化する際や宗教改革運動といった社会的活動において、ドイツ語文書が誰によってどのような目的でどのようなドイツ語で書かれ、それがどのように使用されたかを分析、記述する。

2. 近世ドイツの社会と宗教改革運動

この節では、近世ドイツの社会状況と、そこに於けるルターの宗教改革運動がどのようにして始まり、展開していったかについて述べる。

2) Mattheier (1998a: 720-730), Mattheier (1998b: 768-779) を参照。

3) メイ (著), 小山 (訳) (2005), ヴァーシューレン (著), 東森 (監訳), 五十嵐他 (訳) (2010) を参照。

2. 1 近世ドイツの社会的変化

14世紀中葉から17世紀末までのドイツは、中世から近代への移行期にあった。即ち、土地を仲立ちとする、領主と騎士層との間の契約関係、王侯貴族による農民支配、などを特徴とする封建社会から貨幣・資本を仲立ちとする生産活動、商業活動が進展する近代資本主義社会への移行しつつあった。

ドイツはほぼ現在のオーストリア、ドイツ、スイス、ボヘミアを領土とし、神聖ローマ帝国と呼ばれ、皇帝が統治していた。ドイツはドイツ語を母語とする諸民族の連合国家であるが、ローマ教皇によって古典古代のローマ帝国、中世のフランク王国の後継国家とされ、ドイツ国王は世俗界の支配者として皇帝の冠を受けたので、このことから、神聖ローマ帝国と呼ばれるようになった。

皇帝は大諸侯によって弱小の諸侯の中から選挙によって選ばれたため世俗界の支配者としての権力は弱かった。今日のオーストリア、スイスは皇帝を多く排出していたハプスブルク家が家領として支配していたが、ドイツ各地の諸侯の領邦国家は絶えず帝国から独立した国家たらんとしていた。また、ボヘミア王国も神聖ローマ帝国に属してはいたが、チェコ民族の国家として独立した存在であった。

近世は気候の温暖化や農協技術の発展によって農産物が増産され、それに伴って人口が増加した。また、本来は封建社会とは異質な都市が次々と建設され、都市に住む職人や商人によって生産活動、商業活動が行われ、経済が発展した。

中世は教会や修道院ではラテン語聖書が正典であったから、キリスト教界ではラテン語が共通語であった。また、行政や司法の分野でもローマ法を引き継いでいたからラテン語による文献が基本であった。しかし、近世に入り、社会状況が変化したため、ラテン語文献では実情に合わない事態が生じるようになった。その結果、皇帝や諸侯の官房、都市の官房などにおける立法、行政の分野ではドイツ語による文献がどんどん増加していった。また、教会や大学では宗教用語や学術語として近世末期までラテン語が共通語であったが、聖書のドイツ語翻訳やドイツ語による講義など、徐々にドイツ語が取って代わった⁴⁾。

4) 佐々木 (2001: 351-378)

中世に比して近世では、社会の地域的、階層的流動化が進んだため、皇帝、諸侯、都市の立法、司法などの業務が拡大し、量的にも増加した。そのため、それらの業務を文書によって記録し、保存しておくことが必須となった。このことから文書の重要性が高まった。

また、近世における産業や商業の発展や陸上、河川、海上の交通、通信網の進歩によって、遠隔地との交易や商取引が盛んになった。その際にも、交易や商取引の内容を伝達したり、記録保存しておく必要から文書が重要な役割を果たすようになった⁵⁾。

近世社会において情報の文書化が必須となったことから、読み書き能力を持った人材が求められることとなった。従来、読み書き能力は修道院、神学校や都市のラテン語学校において特定の人のためにラテン語の教育が行われていた。しかし、近世に入ってから、都市を中心に学校や私塾が開かれて、時には女性も含めて広く庶民を対象にしたドイツ語の読み書き能力の教育がおこなわれた。それによって中世に比べて近世における識字率は格段に向上した⁶⁾。

近世に入って従来の高価で大量生産のほとんど不可能な羊皮紙に代わって、安価な紙が大量生産されるようになり、また、それまでの手書きによる文書や書籍の生産に代わって、1450年頃にマインツのヨハネス・グーテンベルク（1400頃-1468頃）によって発明された活字印刷によって、文書や書籍は安価に大量に生産されるようになった。これらのことが読み書き能力の普及をさらに加速した⁷⁾。

2. 2 宗教改革運動

マルティン・ルター（1483-1546）はアウグスティヌス修道会士として長年にわたって厳しい修行をして、救いとは何かという問題と必死に取り組んできた。しかし、いっこうに答えは得られなかった。ところがある日、彼はついにいわゆ

5) Polenz (2000: 121-123)

6) 佐久間 (2006: 101-124), Engelsing (1973: 32-41), Hartweg/Wegera (2005: 63-66)

7) ジルモン (平野 訳) (1995/2005: 285-296), Engelsing (1973: 25-31), Polenz (2000: 116-119, 126-129)

る塔の体験によって、救いは、ローマ・カトリック教会の説く、修行とか善行などのいわゆる善き業わざのような、人の努力によって得られるものではなく、神が我々を救って下さるといふ信仰によってのみ得られるのだという結論に達した。

丁度その頃、マインツ大司教である、ホーエンツォレルン家のアルブレヒト・フォン・ブランデンブルクがローマ教皇の許可を得て、贖宥状を大々的に販売していた。しかし、ルターにとって、金によって救いを得るといふ行為はとうてい許しがたいものであった。ルターはこのことを批判して、1517年に贖宥状に関する『95箇条の提題』をラテン語で書いた。当初彼は純粹に神学的問題として、贖宥状と救いに関して他の修道士や聖職者と公開の議論をするつもりであった。しかし、ルターの意図をよそに、95箇条の提題はすぐさまドイツ語に翻訳され、広く頒布されて読まれた。また、彼の他の著作も大きな反響を呼んだ。それは、ルターの教説が当時の封建的社會にあって虐げられていた農民や、また、ローマ教皇、神聖ローマ帝国皇帝などからの自立を図っていたドイツ諸侯や帝国自由都市民にとって、自分たちの理論武装に格好のものであったからである⁸⁾。反対にルターもまた、ローマ教皇との対決が避けられないことを見て取ると、彼の三大文書のひとつである『ドイツ国民のキリスト教貴族に宛てて。キリスト教界の改善について』の表題からもわかるとおり、ドイツ人の国民感情に訴え、自らの盾として利用しようとしている。

ところで、ルターは、贖宥状の販売などに表れたローマ・カトリック教会の墮落や腐敗を批判して改革を起こそうとしたわけではない。カトリック教会の墮落、腐敗を批判し、改革を起こそうとした人々はルター以前にすでにたくさん存在する。シトー会やフランシスコ修道会などのさまざまな新しい修道会の設立などはキリスト教の草創期に立ち返ろうとした改革運動である。ルターの改革の本質は、救いに関して、ローマ・カトリック教会が修行や善行などの人の自助努力によるものに対し、ルターはもっぱら神に対する信仰によるものとする、正反対の宗教観を提出したことにある。

8) 松田（編）（1995: 18-35）を参照。

また、教父の著作やカトリック教会の慣習よりももっぱら聖書に基づくことを主張したり、贖宥状の販売などを批判したのもルターが最初ではない。すでにルターより以前にイギリスのジョン・ウィクリフ（1330頃-1384）やチェコのヤン・フス（1370頃-1415）などが同様のことを言っている。しからば、フスはコンスタンツの公会議で異端と判定され、火刑に処せられたが、なぜフスと同じようにローマ教皇によって破門され、神聖ローマ皇帝からは帝国追放となったルターが同じ運命を辿らなかったのであろうか。それは、フスはルターより100年前のまだカトリック教会の権威が強大だった時代の人であり、その上、ヨーロッパの中でもカトリック教会の勢力が強いボヘミアの人だったことによる。それに対しルターの場合は、カトリック教会の権威もその頃は弱まり、ドイツの諸侯、下級貴族や聖職者、また、経済的、政治的な力を蓄えた一般市民の間に、自立したドイツ国民としての意識が芽生えつつあったから、汎ヨーロッパ的なローマ教皇や神聖ローマ皇帝に反対し、ルターの後ろ盾となったからである。事実ルターは1521年にヴォルムスの国会に召喚され、審問を受けたが、自説を取り消すことなく帰郷する途中、彼の領主であるザクセン選帝侯によってヴァルトブルク城に匿われている。また、ザクセン選帝侯のようなプロテスタント派の諸侯やさらには帝国自由都市も徐々に増えていった。

ルターの教説は彼の周囲の人にだけに影響を与えたわけではない。ルターの思想をさらに急進的に推し進めたトーマス・ミュンツァー（1489-1525）は1524年に農民を助けて、農民蜂起に参加したが、1525年には敗れて、自分も処刑された。

スイスではハプスブルク家の支配に抵抗し、独立しようとする機運が高まっていた。ウルリヒ・ツヴィングリ（1484-1531）は帝国自由都市チューリヒに迎えられて、チューリヒの新教化に成功した。また、フランス語圏ではジャン・カルヴァン（1509-1564）がやはりジュネーブの新教化に成功した。

カトリック陣営も手をこまねいていたわけではない。インゴルシュタットの大学教授で神学者であるヨハネス・エック（1486-1543）、ライプツィヒの神学者、ヒエロニムス・エムザー（1478-1527）、アルザスの神学者、説教師で、作家でも

あるトーマス・ムルナー（1475-1537）などが主として公開状という形で多数の論争書を發表して、ルターを始めとするプロテスタント陣営に対抗した。また、1534年にはイエズス会が設立されて、布教や学校教育などによってカトリック陣営の巻き返しを図った。

このような対立は宗教界に留まらなかった。1546-1547年にはプロテスタント派諸侯、帝国自由都市とカトリック側の神聖ローマ帝国皇帝カール5世との間で、支配者同士の覇権争いに発展した。シュマルカルデン戦争と呼ばれるこの戦争は皇帝側の勝利に終わったが、1555年にはアウグスブルクにおいて皇帝側とプロテスタント諸侯、帝国自由都市との間で和議が行われ、諸侯側に旧教、新教の選択の自由が認められ、「領土を治める者が宗教を決める」という政治的決着がなされた。その結果、プロテスタント派はカトリック派と並ぶ体制、宗派として社会的に認知されることとなった⁹⁾。

3. 民衆教化文書

キリスト教の聖職者は神学校や修道院においてキリスト教の教義を学んだり、修業をして、自らの魂の救済を図るだけでなく、一般の庶民にもキリスト教を布教し、彼らを教化し、救済するという責務がある。庶民の教化に際してはさまざまな種類の文書が使われたがこの節ではそれらにどのようなものがあるかを見ていく。

庶民の教化に際しては、当然、説教や演劇や宗教歌などの口頭によるものが重要な役割を果たした。しかし、それらも原稿や台本や歌詞など、前もって文書の形で用意されたものである。また、演劇作品には「読んで楽しく為になる」という副題が付いていたり、「読者へ」という前書きがあったりする場合が多いから、読んだり、人前で朗読することが前提とされていた。従って、ここでは説教、演劇、宗教歌などの文書は、カテキズム、教訓詩、寓話などの書かれたテキストで

9) 第2節に関しては成瀬、山田、木村（編）（1997: 10, 11章）を参照。

ある文書と同列に扱う。

反対に、カテキズムや教訓詩や寓話などの文書であっても、近世では中世よりも格段に識字率が向上したとは言え、平均化すればまだ人口の5%程度に過ぎなかった。であるから、文書は、今日のように個人による黙読よりも、家庭や集会などにおいて文字の読める者が朗読して他の多数の者に聞かせることの方が多かった。また、対話文書は書かれたテキストであるが、芝居仕立てになっていて、台詞には話し言葉が使われている。ちょうど、説教、演劇、宗教歌とカテキズム、教訓詩、寓話との中間に位置する。従って、これらを説教や演劇や宗教歌などと同列に扱うことは決して的外れとは言えない¹⁰⁾。

また、当時ドイツにはカトリックとプロテスタントが存在し、対抗していた。庶民の教化にあたっては、彼らを自分たちの陣営に引き入れるために、それぞれの立場から自分たちの教義の正しさを主張し、相手の教義を論破してみせる必要があった。このこともさまざまな教化文書の内容や言語を特徴的なものに行っている。これについては第4節で検証する。

3. 1 説教

説教の目的はミサなどの集会において口頭によってキリスト教の教義を庶民に告げ知らせ、教化することである。もちろんその際、文字の読める者は聖書を手元において、時には説教者と一緒に読む。教化に成功するかどうかは説教者の話術と熱意によるところが大きい。

説教は中世以来の長い伝統がある¹¹⁾。フランシスコ修道会やドミニクス修道会などは説教による庶民の教化を重要視した教団である。

アウグスティヌス修道会士であったルターもたくさんの説教をこなしている。彼の説教は弟子のゲオルク・レーラー（1492-1557）によって記録され、出版された。また、アンドレアス・ポアハ（1515頃-1585）はルターの説教を『家庭のための説教集』として出版した。これらは家族の間で読まれたり、教会で朗読さ

10) ジルモン（平野訳）（1995/2005: 305-318）、Scribner（1981: 65-76）

11) Albert（1896: 77-121）

れたり、聖職者が自分の説教の参考にしたりした。

カトリックの神学者の説教集としてはルターの論敵であったヨハネス・エックのものがある。

3. 2 問答書

問答書は文書として作成されているが、本来の教義や宗教的問題についての口頭でのやりとりを模したものである。これにはカテキズムや対話書がある。

3. 2. 1 カテキズム

キリスト教の教義を体系的に説明したものである。日本ではカトリックは公教要理、プロテスタントは教理問答と言う。「質問」と「答え」という問答の形をとることが多い。ふつう若者など、いわばキリスト教に関しては初心者である人たちにキリスト教の教義の手ほどきをするための「教科書」とも言うべきものである。聖職者がこれを使って初心者に解説し、初心者はこれを暗唱して覚えることの方が多かった¹²⁾。

プロテスタントのカテキズムとしてはルターが1929年に書いた『ドイツ語教理問答書(大教理問答書)』と『便覧、小教理問答書』がある。

カトリックのカテキズムとしては、やや時代が下がるが、イエズス会士、ペートルス・カニジウス(1521-1597)が1555年に書いた『キリスト教教義要諦』がある。これはラテン語で書かれている。

3. 2. 2 対話書

ドイツ語で Dialog と呼ばれる対話書はほとんどプロテスタントの神学者や人文主義者によって書かれた。カトリックの信者とプロテスタントの信者が神学的なテーマについて論争をして、後者が前者を論破するという内容である。このような形でカトリックとプロテスタントの教義の違いを明らかにし、プロテスタン

12) ジュリア(平野訳)(1995/2005: 372-381)

トの教義の優越性を示し、教化しようとする。登場人物は2人とは限らず、単なる対話ではなく、芝居仕立てになっており、演劇に近い¹³⁾。

3. 3 文学

説教や問答書はキリスト教の教義やキリスト教界の現状を直接的に論じたり、批判するが、それらを文学作品という形で芸術的に形象化する方がしばしばより説得的であり、また娯楽性もあるところから、大きな教化の効果が期待できる。

これには教訓詩や寓話がある。文学作品は中世以来の伝統として近世でもなお韻文で書かれている場合が多い。韻文作品は朗読されて、耳から入りやすく、記憶も容易である。

3. 3. 1 教訓詩

教訓詩はキリスト教界の惨状を訴え、それによって自分たちの教訓としたり、また、カトリックとプロテスタントがお互いに相手を批判し、自分たちに対する警告とするために書かれた¹⁴⁾。

上述の対話書もそうであるが、教訓詩は Flugschrift (リーフレット、パンフレット) と呼ばれる1枚から8枚ぐらいの、ふつう綴じてない文書であり、大量に印刷され、配布された。また、集会などでは朗読されたり、節をつけて歌われたりした¹⁵⁾。

3. 3. 2 寓話

イソップの寓話はすでに中世からラテン語やドイツ語に翻訳されていた。近世ではハインリヒ・シュタインヘーヴェル (1412-1482/3) がドイツ語に翻訳して、広く流布した。ルターも寓話を教育的手段として重視し、自らも旧約聖書から取

13) Lenk (Hrsg.) (1968: 9-43), Bentzinger (1992: 165-174), Polenz (2000: 238-241)

14) Berger (Hrsg.) (1938: 68-77)

15) Freytag (Hrsg.) (1980), Köhler et al. (Hrsg.) (1978-87) を参照。

集したり、シュタインハーヴェルのものを批判して、自分でも翻訳している¹⁶⁾。

中世末期の14世紀か末ら近世初期の15世紀初め頃にウィーンで成立したと推定され、ニュルンベルクの修道院で発見されたドイツ語訳イソップ寓話集は散文で書かれている。

ルター以外で近世に広く読まれたイソップ寓話集としてはプロテスタント派のエラスムス・アルベルス(1500?-1553)やブルカルト・ヴァルデイス(1490頃-1556)のドイツ語訳がある¹⁷⁾。

3. 4 演劇

演劇は擬似的に現実を再現して見せてくれるから、観衆にとっては臨場感があり、また、娯楽性もあるからきわめて教化に効果的である。従って、カトリック陣営もプロテスタント陣営もさまざまな機会に各地の教会、市内の広場、宮廷など、多様な場所で上演した。また、彼らは共に若者や後進の教育の目的で学校などでの演劇を重視していた¹⁸⁾。

3. 4. 1 プロテスタント演劇とカトリック演劇

プロテスタント陣営の作家としては、パンフィリウス・ゲーゲンバッハ(1480-1424/5)、ニクラウス・マヌエル(1484-1530)、ブルカルト・ヴァルデイス、ハンス・ザックス、トーマス・ナオゲオルグス(1508/9-1563)などがある。彼らの作品は題名に謝肉祭劇と書かれたものがあるが、中世の謝肉祭劇は日常の出来事を諧謔的に扱ったものであった。しかし、宗教改革以降はカトリックの聖職者たちを滑稽に描き、批判するものになった¹⁹⁾。

カトリック陣営の作家としては、ハンス・ザラート(1498-1561)、フェルディナンド2世(1529-1595)などがある。イエズス会が設立されてからイエズス会

16) Dithmar (Hrsg.) (1995: 12-22)

17) Berger (Hrsg.) (1935: 77-80)

18) Kindermann (1959a: 306-352), Kindermann (1959b: 408-484)

19) Kindermann (1959a: 271-306), Berger (Hrsg.) (1935: 5-24)

演劇が推進された。そのようなバロック演劇の作家としては、ヤーコプ・ビーダーマン (1578-1639)、ニコラウス・フォン・アヴァンチーニ (1611-1686)、ジーモン・レッテンパッハー (1634-1706) がいる。彼らはラテン語の教育も兼ねてラテン語で作品を書いた²⁰⁾。

3. 4. 2 同一素材によるプロテスタント演劇とカトリック演劇

聖書中のエピソードである『放蕩息子』や中世以来の伝統的演劇素材である『エブリマン』などはよく知られた話であった。そのため、カトリックの作家もプロテスタントの作家も素材としてとりあげている²¹⁾。しかし、そこにはおのずとカトリックとプロテスタントの宗教観の違いが表現されている。

3. 5 宗教歌

賛美歌などの宗教歌は信者仲間と一緒に声をあげて歌うことによってアイデンティティを確認し、連帯感を高めるのにきわめて大きな効果があったと考えられる。事実、ルターも歌の効果을重視して、自らも作詞、作曲している²²⁾。

カトリック陣営の作詞家としては、ゲオルク・ヴィッツェル (1501-1573)、カスパー・クヴェアハマー (?-1546)、クリストフ・シュヴェアー (?-?), カスパー・ウーレンベルク (1549-1617) などがいる。

プロテスタント陣営の作詞家としてはルター、エラスムス・アルベルス、フィリップ・ニコライ (1556-1608) などがいる。ルターの「神は堅き砦」、ニコライの「起きよと、呼ばれる声がある」、アルベルスの「神は福音を」などは後にバッハがカンタータに作曲している²³⁾。

20) Flemming (Hrsg.) (1930: 5-36)

21) Frenzel (1962: 303-305, 590-593), Wiemken (Hrsg.) (1965: IX-XLIX),
Schweckendiek (1930), Fuhrich-Leisler et al. (1978)

22) Könniker (1975: 142-148)

23) Wolff (? : I-XXII)

4. 民衆教化文書の具体例

この節では民衆教化に使われたさまざまな文書を具体例にもとづいてそれらの言語的特徴、社会的機能などについて考察する。

民衆の教化に使われた説教、問答書、文学、演劇、宗教歌などの文書はそれぞれのジャンルの違いに応じた個性があるから、作者はその個性を利用して最大限の効果をあげようとする。

また、カトリックであれプロテスタントであれ、自分たちの信ずるところを民衆に伝えようとするのが第一であって、いつも宗派の違いばかりを強調するわけではない。ただ、両宗派の宗教観の違いはおのずと表に現れる。また、場合によっては具体的に相手を批判し、自分の宗派の優越性を強調することによって、民衆を教化しようとすることもある。

4. 1 説教

(1) 14世紀の説教「主の降臨について」

次にあげたものは中世の典型的な説教である。その言語的特徴から14世紀に上部ザクセン地方で書かれたものと推測される²⁴⁾。

Ecce venit rex etc. Daz spricht. der kûnik cûmet. wir lûfen zv gegene vnserme losere. Mine vil lieben. wir begen hûte die zukûmft vnsers herren ihesu cristi. die ist zweier hande. An der ersten zûkumft quam vnser herre got den menschen zv losene. vnd quam also daz er liden wolde der lûte riechte. vrteil. vnd smacheit. Ander andern zv kûmft so wirt er kûmen als ein richter vnd ein gewedlich herre der sich rechen wil vber sin vinde die boslich vnd vngetrûweliche wider in haben getan. Dise heilige zith sol vns manen zv grozer bezzerunge vnsers lebenes.²⁵⁾

24) Leyser (Hrsg.) (1838/1970: XXIV)

25) Leyser (Hrsg.) (1838/1970: 40)

エッケ ヴェニット レクス エトツェトラ（見よ、王が来られる などなど）。この言葉は、王が来られる、私たちは我らが救い主のもとへ駆け寄る、ということです。皆さん、今日は我らが主、イエス・キリストの到来を祝う日です。この到来にはふたつあります。第一の到来は我らが主、神が人間を救うため、つまり、人々の罪、恥辱を引き受けるために来られたのです。第二の到来は、キリストが、裁く人、強大な権力を持つ主としてこれから来られるのであり、^{よこしま}邪で不誠実な心をもって自分に逆らった者たちに復讐されるのです。今の聖なる時期は私たちに生き方を正すことを促すものです。

中世では5世紀初めにヒエロニムスが訳したラテン語聖書が正典であり、これを他の言語に翻訳することは禁止されていた²⁶⁾。翻訳する際に解釈が生じ、異端が生まれる可能性があるからである。従って、説教の際は、ラテン語がわからない庶民のためにまず聖書のラテン語をドイツ語に訳すことから始めるのである。そしてこれを敷衍しつつ解説していく。ここでは会衆に呼びかける文句も見られ、教え諭す雰囲気がよく表れている。

(2) ルターの説教「主の公現の祝日後の第四日曜日に、マタイ福音書第八章」

次にこれとルターが1533年にヴィッテンベルクで行った説教と比べてみる。ルターはまずマタイ福音書の第八章、23から27の短い挿話を読み上げる。それは、イエスが弟子を連れて舟に乗り海を渡っていると、突然、暴風が起こって舟が波に呑み込まれそうになった、イエスは眠っていたが、弟子たちが起こして、助けを求めた、イエスは弟子たちに向かって「信仰の薄い者たちよ」と言った、そして風と海とを叱ると、静かになった、というものである。その後、ルターはこの挿話を次のように解釈してみせる。

Wir sehen im heüttigen Euangelio, das uns ein solche Histori drinn für ge-

26) Polenz (2000: 256-258)

halten wird, auß welcher wir nit lernen, was man thûn soll, Denn von unsern wercken wirdt hie nichts gehandelt, Sonder was man in nôtten und widerwertigkeit glauben, und wie man sich trösten soll. Darumb ists der hohen predigten eine vom glauben.²⁷⁾

今日の福音書の中に出てくるこの話からわかることは、ここでは、人は何をすべきかを学ぶではありません。ここのテーマは我々がする業^{わざ}のことではなく、危難にあったとき何を信じたらいいのか、どう自らを安心させたらいいかということです。ですから、この話は信仰についての大切な教えのひとつです。

ここではルターはもはや聖書のラテン語を訳す必要はない。自分のドイツ語訳を読み上げるだけである。このことは会衆にルターの説教の内容に注意を集中させる。そして彼は、カトリックの教えとは異なって、信仰こそが心の平安をもたらすのだという自説を説くのである。

4. 2 問答書

4. 2. 1 カテキズム

ここではルターとイエズス会士であるカニジウスのカテキズムを比較する。

(1) ルターの小教理問答書「第三条、義認について」

Jch glaube an den Heiligen geist, ein heilige Christliche kirche, die gemeine der heiligen, vergebung der sunden, aufferstehung des fleisches und ein ewiges leben, AMEN.

Was ist das? Antwort.

Jch glaube, das ich nicht aus eigener vernunft noch krafft an Jhesum Christ meinen Herrn glauben odder zu jm komen kan, Sondern der Heilige geist hat mich durchs Euangelion beruffen, mit seinen gaben erleuchtet, jm rechten

27) D. Martin Luthers Werke Bd. 52, S. 123

glauben geheiligt und erhalten, gleich wie er die gantze Christenheit auff erden berüfft, samlet, erleucht, heiligt und bey Jhesu Christo erhelt jm rechten einigen glauben, Jnn welcher Christenheit Er mir und allen gleubigen teglich alle sunde reichlich vergibt, Und am jüngsten tage mich und alle todtten aufferwecken wird, Und mir sampt allen gleubigen jnn Christo ein ewiges leben geben wird, Das ist gewislich war.²⁸⁾

私は聖霊、聖なるキリスト教会、聖なる人々、罪の赦し、肉の復活、さらに永遠の命を信じます。アーメン

これはどういうことか？ 答え。

私は信じます、私は自分の理性や力によってイエス・キリスト、我が主を信じたり、彼のもとに至ることができるのでなく、聖霊が私を福音によって呼び、賜物をもって啓示し、この世のキリスト教徒の皆と一緒に呼び集め、啓示し、清め、イエス・キリストのもと正しき無二の信仰に受け入れてくださったのです、そして、キリストの教えにおいて私とすべての信者のすべての罪を赦し、最後の審判の日には私とすべての死者を蘇らせ、私とすべての信者にキリストにおいて永遠の命が与えられるのです。これは確かな真実です。

- (2) カンジウスのキリスト教教義要諦「第二部、キリスト教における義に関して
130 キリスト教において義とされるものは何か？」

Insgesamt sind es zwei Dinge, die in diesen Worten enthalten sind: *Meide das Böse und tu gas Gute*, wie auch Jesaja lehrt: *Lasst ab von euerem üblen Treiben und lernt Gutes zu tun*. Das Erste besteht darin, die Sünden zu erkennen und zu meiden, da sie für die Menschen die größten Übel sind; das Zweite beschäftigt sich mit dem Erbitten und Erlangen des Guten.²⁹⁾

この言葉には二つのことが含まれている: 悪を避けよ、そして、善を行え、で

28) D. Martin Luthers Werke Bd. 30, S. 366-368

29) Filser / Leimgruber (Hrsg.) (2003: 198)

ある。イザヤも、おまえたちは悪しき行いをやめ、善きことを行うことを学べと教えている。ひとつめの言葉は、罪を見分け、避けることである。罪は人間にとって最大の不幸であるからだ。ふたつめの言葉は、善を求め、得ようと努力することである。

「質問」と「答え」という形式は両者で同じである。ただ、カニジウスの方は、(ここでは現代ドイツ語訳をあげるが、)元来はラテン語で書かれている。庶民のためと言うよりは、エリート教育のためのものということが見て取れる。

質問の内容も、「キリスト教徒にとって正しい生き方はどういうものか、人は何によって義とされるか」というのも同じである。しかし、答えの内容は異なっている。プロテスタントの答えはルターの教えるところであり、抽象的である。それに対し、カトリックは具体的である。これらの説くところはどちらが正しいとも決定ができない。両者とも正しいのであろう。何故なら、肉体と魂といったような、人間の持つ二つの面に関わっているからである。現在でもプロテスタントとカトリックはお互いに理解し合い、近づこうと努力しているようである。

カテキズムはカトリックとプロテスタントが対峙した時代にあっては、それぞれの教義を次世代の人々に浸透させるための重要な文書のひとつである。

4. 2. 2 対話書

(1) 作者不詳『唐鍬のハンス』

作者不詳のこの対話書は1521年にシュトラスブルクで出版された。ルターの教えに共感した農民のハンスが神学者ムルナーやケルン大学で神学を学んできた自分の息子を議論によってやりこめるという筋のものである。

Karsthans: Wil der Murner vnsern christlichen glauben gründen in glichnus menschlicher törechter geschichten, deren yrrung kein mas geschepff mag werden, vermeint in glichnuß, wo ein land nit einen künig oder fürsten hat, möcht das land nit beston, also wo der glauben nit ein oberkeit

vnd ein haubt het, möcht der glaub in der gmein nit lang bston? Losen, du daube schellige murmaw, du falscher rölling! Ich sag: wo der glaub nit ein haubt het, möcht er nit allein nit lang bston, sunder es wer kein glaub, wann der glaub, sol er sein, so muß er gericht sein gegen etwas, das man glauben sol. Aber das, so man glaubet in rechter christenheit, ist weder bapst, bischoff noch keyser, sunder Christus Jesus, der lebendig sun gottes, der ist diser fels, daruff christlicher glaub rüwet, der ist das lebendig haubt, von welchem der christlich glaub flüsset on mangel, on welchs haubt diser glaub nit wirt angefangen noch volbracht!³⁰⁾

唐鐮のハンス：ムルナーはキリスト教の信仰を間違いだらけの愚かな人間世界に喩えて、国王や諸侯がいなければ、国が成り立たないのと同様、信仰も上に立つ者、^{かしら}頭がいなければ、長続きはしないと云うが、よく聞け、猫のムルナー、猫かぶりめ！わしに言わせれば、信仰に頭となる人がいなければ、長続きしないというだけだったら、それは信仰ではないのだ。信仰という以上は、信仰の対象が^{ただし}義なくてはならん。それは教皇でも司教でも皇帝でもなく、神の御子、イエス・キリスト様だ。あの方はキリスト教信仰の礎の岩であり、生ける頭であり、信仰のまったき源であり、それなくしては信仰が始まらず、完成もないのだ。

ここでは、もはや農民であってもルターの教えをよく理解しており、ムルナーのような神学者とも対等に議論することができる存在として描かれている。もちろんこの文書を書いたのは教養のある人文主義者であろう。農民を理想的に描いていて、現実とは異なると思われる。しかし、近世においては農民などの庶民も教養を身につけて、明確な自己主張をするようになりつつあったことも確かな事実であろう。

この「唐鐮のハンス」は何かあるとすぐに唐鐮を手にとって相手を脅そうとす

30) Lenk (Hrsg.) (1968: 87)

る粗暴で、反抗的な農民として描かれている。だが、このイメージは庶民階層のシンボルとして大きな人気を呼び、広まった。ルターなども自分の文書の中で使っている³¹⁾。

(2) ハンス・ザックス 『司教座聖堂参事会員と靴屋の議論』

ハンス・ザックス (1494-1576) は帝国自由都市、ニュルンベルクの靴屋の親方である。彼は 1524 年にこの対話書を書いた。ここでも、カトリックの司祭が、ローマ教皇はキリストの代理人であり、皇帝よりずっと偉い、と主張するのに対して、プロテスタント派の靴屋は聖書を引用して、理路整然と論破する、というものである。

SCHUSTER: Ist der bapst ein solcher geweltiger herr, so ist er gewyßlich kein Stathalter Christi, wann Christus spricht Joan. am xviiij.: ‚Mein reich ist nit von diser welt‘, vnd Joan. vj floch Christus, da man jn zum könig machen wolt; Auch sprach Christus zû seinen jungern, Lu. xxij: ‚Die weltlichen könig herrschen, vnd die gewaltigen heist man gnedige herrn, jr aber nit also; der gröst vndter eüch soll sein wie der jungst vnd der fürnemst wie der diener.‘ Deßhalb der bapst vnnnd jr geystlichen seyt nur diener der Christlichen gemein, wo jr anders auß got seyt, derhalb mag man euch wol straffen.³²⁾

靴屋：もし教皇がそんなに偉い人なら、きつとキリストの代理人ではないでしょう。なぜならキリストはヨハネの第十八章で、「私の国はこの世のものではない」と言っておられるし、第六章では、人が彼を王にしようとしたとき、逃げ出されたのです。ルカの第二十二章では弟子たちに向かって「この世の王たちは君臨し、権力のある者たちは殿様と呼ばれている。だがおまえたちはそうではない。おまえたちの中でいちばん年上の者は最も年下の者の

31) Könneker (1975: 103-104), Lenk (Hrsg.) (1968: 34)

32) Lenk (Hrsg.) (1968: 198)

ようでなくてはならず、最も身分の高い者は僕しもべのようではなければならない」と言われた。だから教皇やあなたたち聖職者はキリスト教界の僕にすぎないので。もしあなた方が神のものでないときは、人は罰することもできるのです。

作者のハンス・ザックス自身が市民であり、ラテン語ができ、古典を読んで教養があり、自分でもたくさんの作品を残した。この時代ではすでに市民層は自立した存在であり、ここでの登場人物の靴屋のように聖書の知識も十分にあり、理路整然と議論することができる、ということが示されている。

4. 3 文学

4. 3. 1 教訓詩

(1) トーマス・ムルナー『キリスト教信仰没落の新しい歌』

トーマス・ムルナーはカトリックの神学者であり、フランシスコ会の説教師である。はやくからカトリック教会の腐敗に批判的で、改革を志向していた。ルターの改革には当初は賛同していたが、急進的な傾向は容認できず、ついにルターの手強い敵対者となった。1522年に書かれたこの詩はルターの改革によってローマ教皇の権威は落ち、神聖ローマ帝国も衰微して、下克上により社会が混乱していることを嘆いている。この歌の調子は悲歌のようであるが、こうして世の中の人々に警鐘を鳴らしているのである。ちなみに、2行目の「兄弟ファイト」は傭兵を指している。近世に入ると戦争も中世的な、馬に乗った騎士によるものから徒歩の傭兵が主役となるものになっていったのである³³⁾。

NVn hört, ich wil euch singen	皆さんお聞きあれ、私が歌いますのは
jnn brüder Veiten thon	兄弟ファイトの調べにのせて
von vngehörten dingen	前代未聞のことごと

33) Berger, A. E. (Hrsg.) (1938: 70)

die layder ietz für gon	残念ながら今起こっているのは
wie dz mit falschen listen	嘘と企みによって
die Christenheyt zergat	キリスト教世界が崩れ落ちるさま
wann dz die fürsten wisten	もし殿様方がこれを知れば
sie theten zû der thadt.	乗り出して来られるでしょう
Der hyrt der ist geschlagen	羊飼いは殺され
die schäflin sein zerstreüt	子羊たちはちりぢり
der Bapst der ist veriagen,	教皇は追われ
kain kron er me auff dreyt	冠は頭から落ちました
vnd ist mit kainen worten	あの人はひとことも
von Christo ye erstiftt	キリストの委託は受けてないと
an hundert tausend orten	至る所で
ist gossen auß das giff.	毒の言葉が撒き散らされてます

Der Kaiser ist kein aduocat	皇帝は保護者の用をなしません
gar hin ist sein gewalt	彼の権力は失われ
den er ja zû der kirchen hat	かつての教会の
der schirm zû boden falt	盾も地に落ちました
sein gebot sein gantz verachtet	彼の命令は軽んぜられます
wee armer christenhait	哀れキリスト教世界
wa vndertheny brachtet	家来が成り上がり
vnd herschafft niderleit. ³⁴⁾	主人を倒そうとします

(2) ハンス・ザックス 『ヴィッテンベルクの小夜啼鳥』

ハンス・ザックスは1523年にこの作品を書いた。彼はこの中で、新しい教説を提唱するルターを夜明けを告げるナイティンゲールに、子羊である一般信者を

34) Köhler (1981) No. 4068

夜の森に誘い込み、搾取する教皇をライオンに、その取り巻きである司教などの聖職者たちを狼や蛇に、カトリック神学者のエック、エムザー、ムルナーなどを猪、山羊、猫などの動物に喩えている。ここではムルナーとは反対にルターの改革によって市民が解放されるという希望に満ちた喜びに溢れている。

Wacht auff es nahent gen dem tag	目覚めよ、まもなく夜が明ける
Jch hör singen im grünen hag	緑の森で歌っているのは
Ein wunigkliche Nachtigall	朗らかな小夜啼鳥
Jr stymme durchklinget perg vnd dal	その声は山に谷に響き渡っている
Die nacht neygt sich gen occident	夜は西に傾き
Der tag get auff von orient	日が東から上ってくる
Die rotprünstige morgenröt	真っ赤な朝焼けが
Her durch die trüben wolcken göt	黒い雲を追い払い
Darauß die liechte sunne thut plicken	輝く太陽が顔をのぞかせ
Des mones schein thut sy verdrücken	月の光に打ち勝ち
Der ist jetz worden pleich vnd finster	月は青白く影をなくした
Der vor mit seinem falschen glinster	かって偽りの輝きをもって
Die gantzen hert schaff hat geplent	羊たちの目を眩ませたので
Das sy sich haben abgewent	みんな背いて
Von jrem hirten vnnnd der weyd	羊飼いと草場を
Vnd haben sy verlassen beyd	ふたつながら捨て去ったのだ
Sind gangen nach des mones schein	月の光に従って
Jn die wiltnus den holtzweg ein	森の中の荒野に迷い込み
Haben gehört des lewen stymm	獅子の声が聞こえたので
Vnnnd seind auch nachgevolget jm ³⁵⁾	その後について行ったのだ

35) Köhler (1981) No. 4687

このナイティンゲールとしてのルターのイメージは当時たいへん人口に膾炙した³⁶⁾。

また、この時代は人をライオン、狼、猪、猫などの獐猛で陰険な動物に喩えて揶揄し、侮辱することが好んで行われた。

4. 3. 2 寓話

(1) ニュルンベルク版イソップ『鷲に空に連れて行かせた蝸牛について』

14世紀末から15世紀初頭に成立したと推測されるこの散文のイソップ寓話集は400年頃のローマの詩人、アヴィアヌスがイソップ寓話をギリシャ語からラテン語に翻訳したものを原本としている³⁷⁾。各寓話の冒頭がほんの数語だけアヴィアヌスからラテン語で引用する形になっているのは権威付けや真性さの証明のためであろう。そしてその後に改めて各寓話の教訓が説明される。次いで本文の寓話が語られる。このドイツ語訳イソップ寓話集の特徴的なことは、最後に今度はキリスト教の立場からの教訓が付け加えられていることである。

例としてあげた寓話では、まず教訓として、人間は自然から与えられたもの以上を望んでも以下を望んでもならない、と言い、あるとき蝸牛が地上で生きていくしかないことに満足できず、空の様子を見に連れて行ってくれる者がいれば、高価な金の冠をあげようと言った、そこへ鷲が現れて、蝸牛を空に連れていき、あちことを見せてくれる、鷲が約束の金の冠を求めると、そんなものを持っているはずがないと断られた、怒った鷲は蝸牛を空から突き落とした、蝸牛は粉々になってしまった、という話である。そしてその後のキリスト教の教訓は以下の通りである。上で見た中世の説教と同じように、いかにも中世カトリックの雰囲気があるのが感じられる。

Gaistleich: Pey dem sneken ist ein yeder hochuertiger mensch zu versten.

Der adlär ist der tieuel, der fürt den menschen auf in die höch vnd lätt in da

36) Könneker (1975: 151-152)

37) Grubmüller (Hrsg.) (1994: IX)

versüchen mangerlay lust wertleichts reichthumbz, vnd so er im dez vil ge-
 czaigt, zu jüngst lät er in dann vallen, aintweder hie in diser welt oder
 chunfftichleich nach dem töd, da er dann so gar czeprist daz er zu chainem
 gesunt nimmer chömen mag.³⁸⁾

キリスト教の解釈：蝸牛とは高慢な人間のことだと解釈される。鷲は悪魔で、
 人間を空高く連れて行って、この世の贅沢の快樂をたくさん味あわせてくれる。
 いろいろ見せてから最後に、この世か、あるいは、死後の世界へ突き落とす。
 そうすると人間は粉々になって、決してまともではいられないのだ。

(2) エラスムス・アルベルス『ロバの教皇』

アルベルスはルターの弟子である。彼が1534年に翻訳し、出版したイソップ
 寓話集は韻文である。ここにあげた例では、イソップ寓話の中の、ライオンの皮
 を被ったロバが人を騙して、威張っていたが、最後には粉屋の主人に化けの皮を
 剥がされ、罰せられる、という話をアルベルスは書き換えて、ローマ教皇をロバ
 に喩えて彼の行状を揶揄し、アンティクリストだと批判し、反対に、ルターを粉
 屋のロバの主人に喩えて賞賛している。そして最後にパターンどおり、人は見か
 けによらないという教訓で結んでいる。

[…]	[…]
Der Esel zog wider zu hauß,	ロバは故郷に戻り
Vnd gab sich für ein Löwen auß,	自分はライオンだと称した
Vnd für ein grossen herrn auff erden,	この世でいちばん偉いのだ
Der aller heiligst wolt er werden,	いちばん神聖で
Vnd herschen vber alle Pfarrn,	司祭みんなの上に立つ人だと
Vnd sah doch gleich eim grossen Narrn,	でも愚か者にしか見えなかった
[…]	[…]

38) Grubmüller (Hrsg.) (1994: 11)

Er satzt auch Keiser ab vnd ein,	彼は皇帝も据えたり降ろしたり
Das möcht ein stoltzer Esel sein,	そんな偉いロバになりたかった
Die Keyser musten sein sein knecht.	皇帝方は ^{がた} やむをえず彼の下僕になった
[…]	[…]
Es hielt ein jeder sein gebott,	皆は彼の命令を守った
Als ob er wer der höchste Gott,	あたかも至高の神であるかのように
Er hatt den Himel feil vmb gelt,	彼は金のために天国を売った
Betrog also die gantze Welt,	かくして全世界をペテンにかけた
Er trug Gott selbst im himel drein,	自ら天国の神になり代わった
Das mocht ein stoltzer Esel sein.	ロバはそんなに偉くなろうとした
[…]	[…]
Der Man ist warlich ehren werdt,	この方は本当に尊敬に値いする
(Wiewohl er nicht der ehrn begert)	(もっとも彼は尊敬など望まないが)
Der vns vom Esel hat erlost,	この人が私たちをロバから解放し
Vnd angezeigt den rechten trost,	そして本当の心の ^{よりどころ} を ^よ 示したのだ
Den frommen Heylandt Jhesu Christ,	正しき救世主、イエス・キリストを
Der aller menschen Heylandt ist,	この方は全人類の救世主なのだ
Martinus Luther ist der Man	マルティン・ルターこそその人
Der solchen dienst vns hat gethan,	私たちのために尽くしてくれ
Vnd offenbart den Widderchrist,	アンチクリストを暴いたのだ
[…]	[…]
Morale.	教訓
Also gehts zu in dieser Welt,	この世はこれと同じ
Das man die für die besten helt,	立派だと思われている人も
Vnd vber all gelerten preist,	学があると褒められる人も
Die nie kein tugendt han beweist, ³⁹⁾	徳のあったためしがない

39) Braune (Hrsg.) (1892: 142-145)

寓話がいつも相手陣営を批判するために使われたとは限らない。むしろ一般的、日常的な教訓を示して庶民を教化する目的のものが多く。

4. 4 演劇

この時代の文学作品や演劇作品のタイトルにはたいいてい Kurtzweilich vnd nützlich zu lesen 「読んで楽しく、為になる」という文句が副題として入っている。これは中世の諧謔的な謝肉祭劇の伝統を引き継いでいるということもあろうが、どんな深刻な宗教的な問題や対立をテーマとする演劇であっても、また、それが生きていく上での実際的な利益をもたらしてくれるものであっても、やはり楽しいものでなくては教育的な効果はあがらない、という作者の間に共通した認識があったからであろう。

また「読んで」とあるから、実際に上演するだけでなく、個人で読んだり、聴衆の前で朗読したりして楽しむことが前提とされていたことがわかる。

一般に文書の印刷、出版はその印刷所がカトリック勢力の強いところにあるか、プロテスタント諸侯の領地や新教化した都市にあるかで大きく左右された。特に、カトリックの強い地方、例えば、オーストリア、バイエルン、また都市では、ヴィーン、ケルン、ミュンヘンなどは、検閲が厳しく、プロテスタント寄りの文書を出版することは難しかった⁴⁰⁾。

このことは公の場で上演する演劇の場合は特にそうである。プロテスタント派のマヌエルがスイスのベルンで、ヴァルデイスがバルト海沿岸のリガで執筆、上演したのも決して偶然ではない。これらの都市はプロテスタント派であったからである。また、ナオゲオルグスはカトリックの勢力が強いバイエルンのシュトラウビングで生まれたが、彼がそこで作品を書き、それがアウグスブルクで上演されたのも、シュトラウビングが一時的にせよ宗教改革が行われたこと、アウグスブルクが各宗派に寛容であったことによる。ただ、どの地方、都市がプロテスタ

40) Polenz (2000: 139)

ント派、あるいは、カトリック派であるかは政治的な成り行きによってかなり変化した。

4. 4. 1 プロテスタント演劇とカトリック演劇

(1) ニクラウス・マヌエル『教皇と彼の司祭達の謝肉祭』第五幕

マヌエルのこの作品は1522年に出版され、1523年にベルンで上演されたものである。この作品は謝肉祭の伝統を引き継いで、ローマ教皇とその取り巻きたちの贅沢で驕った生活ぶりを諧謔的に描いている。これによってプロテスタントの立場からカトリックを皮肉たっぷりに批判しているものである。

Petrus.

Lieber priester, sag mir an:
Was mag doch das sin für ein man?
Jst er ein türck oder ist er ein heyd,
Das man in so hoch uff den achseln treidt,
Oder hat er sunst gar kein füß,
Das man in also tragen muß?

Cortisan. Virgilius lüttenstern.

Sidmal und du selv Petrus bist,
Weistu den nit wol, wer er ist?
Das sol mich billich wunder nen.
Doch wil ich in zû erkennen gen:
Der, den man do also hoch treit,
Jst der gröst in der christenheit.
Er ist ein bapst zû Rhom und wyter me
Künig in Sicilien und Trinacrie,
[...]

Petrus.

ペテロ

司祭さん教えてください
あれはどういう方でしょうか。
トルコ人ですか、異教徒でしょうか
人の肩に担ぎ上げられていますか
それとも脚がないので運んで
やらねばならないのでしょうか

廷臣 V. リュッテンシュテルン

あなたはペテロ様でしょう
あれが誰だか本当にご存じないので
こりゃ本当に驚いた
では教えて差し上げますが
あの高々と担がれているのは
キリスト教世界でいちばん偉い人
ローマ教皇ですが、それだけでなく
シチリア、トリナクリエの王にして
[...]

ペテロ

Das sind mir frömd und ungehört sachen!	そいつは妙だ、聞いたこともない
Wie könd ich doch ein statthalter machen	どうして私が代理を定めよう
Über sölch land und lüt?	この国と人々の上に立つ人を
Jch hatt doch uff ertrich nüt.	私はこの世では無一文だったのだ
Woher kommend im die richen land	どうしてそのような豊かな国々
Zü synem gewalt und großen stand? ⁴¹⁾	権力と位が彼のものとなったのだ

(2) フェルディナント2世・フォン・ティロール『人生の鑑』

フェルディナント2世は神聖ローマ帝国皇帝マクシミリアンの孫であり、ボヘミア＝ハンガリー王、後の皇帝フェルディナント1世の次男としてインスブルックに生まれた。1547年から16年間、父親に代わってボヘミアを統治した。彼はカトリック勢力の代表としてボヘミアのフス派に対抗し、また1547年にはシュマルカルデン戦争にも参加した。

この作品は1584年に出版されたが、上演されたかどうかは不明である。

この作品の目的は、以下に引用する「読者へ」にもあるとおり、人生をキリスト教徒として正しく生きるにはどうしたらいいかを学んでもらうためとされている。伝統的なカトリックの考え方であり、それにもとづく教育的な目的をもったものである。

Zu dem Leser

[…]

Also haben hochgedachte Fürst. Drt. dise Comœdi, so sy Speculum vitæ humanæ, das ist / ain Spiegel des Menschlichen Lebens genennet / auff ain andere vnnnd kurtze weiß zuesamen gezogen / damit der zuehörer nit allain in der jetzigen verkörten Welt lauf / guets vnnnd böses / wie auch solliche baide von Gott dem Allmechtigen belohnt vnd gestrafft / anhören / sondern auch

41) Berger (Hrsg.) (1935: 81-82)

nachdem die Materi diser Comoedi sein kurtz vnd deutlich außgefürt / alles desto besser in die gedächtnuß fassen / sich darinnen Spieglen vnnd ain Exempel sein leben dardurch zerichten vnd zubesseren darauß nemen möge.⁴²⁾

読者へ

[…]

殿下がこの喜劇を人生の鑑 / すなわち人の生の鏡と名付けられ / 従来とは異なり、短くまとめられたのは / 聴衆が当今の逆さまの世界の動きの / 善きことや悪しきことを / また両方が全能の神によって報いられたり、罰せられするさまに / 耳を傾けるだけでなく / この喜劇の題材が要領よく演じられることによって / 一切がよりよく記憶に刻みつけられ / 鏡となり手本となって自分の人生を正し、改善してもらうためでもある。

以下の第一幕の場面では、隠者が貴族の若様に向かって人生の心得を説いている。

EINSIDEL

[…]

vnnd darumben mein lieber Sohn / wil ich dir hiemit gleich schließlich raten / das du vnder allen deinen fürgeschlagnen wegen / dich inn den Eestandt begeben hettest / vnd weil du vngefährlich der Welt lauff / guets vnd böses / von mir vernommen / wil ich dich auch vermanet haben / dieweil du von Gott mit Reichthumb vnd Guet vberflüssig versehen / das du deine sachen allhie auf diser Welt / dermassen anstelltest / wie es dann gar wol sein kan / damit du dessen / was dir Gott geben / mit guetem gewissen niessen / allhie seligklich sterben / vnnd dort inn jhener Welt / die ewig Seligkait erlangen mögest.⁴³⁾

42) Thomke (Hrsg.) (1996: 826)

43) Thomke (Hrsg.) (1996: 850)

隠者

[…]

そこで、あなた様 / 最後にごお勧めいたしますが / あなた様のこれからの計画のなかでもまず結婚されますよう / それから、あなた様は大体の世の中の動き / 善きことと悪しきことを / 私から聞かれたのですから忠告しておきます / あなた様は神から富と幸運をたっぷりと恵まれています / この世の物事をうまく塩梅し / 皆を幸せにしましょう / そうすればあなた様は / 神が下されたものを / 心安らかに享受し / この世で幸せな生涯を終え / あの世界では / 永遠の幸せを得ることができるのです。

フェルディナント2世が王侯貴族の出自であるからというわけではなく、一般的にカトリックの作家たちはプロテスタント勢力に対抗し、彼らの教義を論破するするという目的のために作品を書くという意識はあまりないように見える。少なくとも彼らを見下ろす態度をとる。あたかもカトリックの教義は普遍的であり、その普及に努めてさえいけばいいのだと主張しているようである。

(3) ヤーコプ・ビーダーマン『ケノドクスス パリの博士』第五幕、第九場

ビーダーマンはイエズス会士である。この作品は1600年頃に書かれたが、1602年にアウグスブルクにあるイエズス会のギムナジウムで初演された。この作品はバロック時代のものであり、いわゆるイエズス会演劇に属する。ただし、ここに引用したテキストは当時、ヨアヒム・マイヒェルによって独訳され、1635年にミュンヘンで出版されたものである。

この作品は1084年にカルトゥジオ修道会を開いた聖ブルーノを主人公とする物語である。ケノドクススというこの世で功を遂げ名を成した博士が死に際に自分は地獄に落ちると叫んで死んだ様子を見て聖ブルーノはショックを受ける。そしてこの世の栄誉ははかないものであることを悟って隠者生活に入るというものである。

Bruno

Der Doctor hat uns gwarnet wol
Vor weme man sich huetten soll
Vor allem nemblich auff der Welt
In dem er uns hat fürgestellt
Zuhuetten vor eim solchen Todt
Davor uns wöll behuetten Gott.
Wer nit will solchen Todt noch leiden
Der mueß ein solches Leben meiden
Ach Gott / ach was mueß es doch seyn
In Ewigkeit dort leiden Peyn
In ewigklicher Flammen sitzen
In ewigen Todtsängsten schwitzen
Allda der ewig Wurm nagt
Der das gottloß Gewissen plagt.
[...]

ブルーノ

博士は私たちに警告してくれたのだろう
何に用心したらいいのか
とりわけこの世にあるときは
私たちに示したのは
このような死に用心すること
神様、私たちをお守りください
このような死を迎えたくない者は
あのような生を避けなければならない
神様、何をすればいいのでしょうか
永遠に苦悩し
永遠に炎に巻かれ
永遠に死の不安に汗を垂らし
永遠に良心の虫に囁られ
神を失い苦しむ者は

Bruno

Mich helt nichts auf der Welt mehr auf.
All zarte Klaidler müsten weck
Diß härin Klaid mein Leib bedeck
Den will ich nun mortificiern
Torquieren / plagen und vexiern.
Mit schlagen und discipliniern
Mit strengen Fasten consumiern
Mit wachen / betten / occupiern
Vnd allermassen supprimiern.

ブルーノ

私はこの世に何も未練はない
柔らかな衣ころもはみんな捨てよう
この毛の衣で身を覆おう
これからこの身に苦行を課する
痛めつけ、苦しめ、悩ませ
叩いて躡け
断食によって消耗させ
眠らず祈りに専念し
完全に抑えつけ

Jhn bringen in die Dienstbarkait 私の意に従わせ
Auff das er mich nit bring in Laid.⁴⁴⁾ 私を悩ませないように

この世のはかなさを感じ、死後の煉獄の恐ろしさを思って、俗世を去り、厳しい修行の生活を送ることを決意するというのは伝統的なカトリック思想である。この例からも、イエズス会演劇もプロテスタント思想との対決よりも、もっぱらカトリック思想の教育に貢献することが目的であることがわかる。

4. 3. 2 同一素材によるプロテスタント演劇とカトリック演劇

「放蕩息子」の挿話は新約聖書の中のルカの福音書、第十五章でイエスが語ったものである。ある人に2人の息子があつた、次男は父親の財産のうちから自分の相続分をもらつて、異郷に去つた、彼はそこで贅沢三昧の驕つた生活をして、すべての財産を使い果たしてしまう、飢えて豚の番人にやとつてもらつても、豚の餌さえ食べることを許されない、彼は後悔して、自分が犯した罪を赦してもらおうと父親のもとへ帰る、父親は、迷つて失われたと思つていた子羊と同様に、温かく迎え入れる、他方、父親のもとに留まり、従順に働いてきた長男はこれに腹をたてる、父親は、次男は死んでいたのに生き返つたのだと言つて、一緒に祝おうと説得する、という話である。これはきわめてルターの思想に近いものである。ただ、よく知られた話であるので、プロテスタントの作家だけでなく、カトリックの作家も果敢に彼らの立場からの解釈を作品にしている。

(4) ブルカルト・ヴァルディス『放蕩息子の寓話』

ヴァルディスはプロテスタント派の作家である。この作品は1527年にリガで出版され、上演された。

彼は、次の「読者に」にもあるように、この作品の趣旨を、ルターの説くところに従つて、救いは人の努力によるのではなく、信仰によってのみである、と記

44) Flemming (Hrsg.) (1930: 180-183)

している。

Tho dem Leser.

読者に

[…]

[…]

Als vnße salicheit by GODE steydt,

私たちの幸せは神のもとにある

Rycklick makt salich vth GNAD vnd gunst

至福は恩寵と愛顧によるのであり

Dorch CHRJSTVS hülpe, arbeydt, kunst

キリストのお助けと辛苦と技による

Vth gelouen alleyn, vnd nicht dorch werck⁴⁵⁾

信仰によってのみ、業^{わざ}にはよらない

そして、長男を、以下のように、依然として人の業^{わざ}にしがみつ^つく隠者として登場させた上で、進行役によって長男を断罪させている。このような場面を設けることによって、「信仰によってのみ」の趣旨が対比的に強調されている。

Olste Szohn

長男

[…]

[…]

Dar ick her kumm, ick wedder faer,

私はもとの場所に戻ります

Myns wercks wedder nemen war,

私の仕事をまた始めます

[…]

[…]

Jck seh, ich hebbe nicht genoch gedaenn.

私は働きが足りなかったと思います

Fort will ick hebben keyn vorwytenn,

今後は人に非難されないよう

Jck will my vp dat högeste bevlytenn;

最大限に努めます

Myn schade rouwet my mechtig Beer.

私は怠慢をたいへん後悔しています

Jck weth, ick werde erlangen ehr.

私はきっと栄誉を得ると思います

De nü keyn gudt werck hefft gedaen,

善き業^{わざ}を何もしたことがない者が

Scholde de vor my ymm hemel gaen?⁴⁶⁾

私より先に天国に入れましょうか?

[…]

[…]

Actor

進行役

45) Berger (Hrsg.) (1935: 143)

46) Berger (Hrsg.) (1935: 190)

Hört tho, wat vnß de schriftt vormeldt, […]:	聴け、聖書が述べていることを […]:
De sick vorhöget vp düsser erden,	この世で自分を高くする者は
De werdt van Godt ernederigt werdenn;	あの世で神から低くされるだろう
We sick vp erden maket kleynn,	この世で自らを低くする者は
De werdt by GODE vorhöget alleynnn.	あの世で神から高くされるだろうと
Düsse hyllige man jnn tempel kumbt,	神殿に入ってくるこの聖者は
Syner guden wercke he sick berumbt;	自分の善き業を誇っているが
Wo geystlick he van buten ys,	いかに霊的に見えようとも
De schalck steckt drynn vorborgen gewyß. ⁴⁷⁾	内には悪者が潜んでいる

(5) ハンス・ザラート『ルカの福音書第十五章 放蕩息子の寓話』

ザラートはカトリックの作家である。この作品は1537年にバーゼルで出版され、ルツェルンで上演された。

次の「序言」からもわかるとおり、この作品の趣旨は罪を犯した者は悔い改めること、罪を犯した他人を見て自分の生活を改めることを勧めることである。

Vorreed

[…]

Denn die Engel Gottes im hymmel / fröwendt sich über eyn sündler der da
bûß thût. Darumb du Leser nymm das honig vnd nit das giff / von mynem
schriben / so doch nüt bessers ist / dann eyn gegenwurff dem menschen
sich selbs leeren erkennen / vnnnd vnser läben dadurch besseren.⁴⁸⁾

序言

[…]

何故なら天国の神の天使は / 悔い改める罪人を喜ぶからです。ですから、読者

47) Berger (Hrsg.) (1935: 204-205)

48) Haas (Hrsg.) (1989: 66)

よ、毒ではなく蜜を / 私の書いたものから受け取ってください / 何故なら他人の姿を見て己を知ることを学び / それによって自分たちの生活を改めること / ほど良いことはないからです。

この作品では「教師」が登場する。彼は観客に舞台上の出来事の意味を解説する役割を負っている。以下の部分でも改悛が大切であることをこの放蕩息子から学ぶことを勧めている。信仰のことには何も触れていない。

¶ [···] so kumpt der Leerer .	¶ [···] そこへ 教師 が登場
[···]	[···]
Dann vnser Sun erbod sich hiemit	それから息子は申し出た
Er wöllt syns vatters taglöner werden	自分の父親の日雇いになり
Syn myßthat versünen mit arbeit vff erden	自分の過ちを労働で償いたいと
Vns wirt ouch klarlich zeyget an	私たちにはっきりと示されたことは
War büßvertigkeit sol die eygenschaft han	本当の改悛の情のあるべき姿
Jm hertzen der rüw / die bicht im mund	心の中で悔い改め / 懺悔を口で唱え
Wär gloubt / thût gnûg zû aller stund	真に信じ / 常に怠らず
Damit sond wir dann heyn wertz keren	私たちは故郷に帰るのです
Zû Gott vnserm vatter / als wir hie leeren	父なる神のもとへ / それはここで
Von disem vnserm verlornen sun	放蕩息子から学んだ通りである
Vff den so merckent aber nun	さて次にご覧なさい
Der gaat yetz zû syns vatters huß	彼は今から自分の父親の家に向かう
Nun hörent was will werden daruß. ⁴⁹⁾	これからどうなるか、お聞きあれ

次に、エブリマン劇についてである。幸せに暮らしている人の所へある日、突然、死神が訪れる。その人はあわてふためき、自分がまだ生き続けたいことをい

49) Haas (Hrsg.) (1989: 165)

ろいろな理由を持ち出して訴えるが、死神は言うこと聞いてくれない、結局、彼は死ななくてはならない。このような話は中世からあるメメント・モーリ（死を忘れるな）のテーマである。また、これはきわめてカトリック的テーマである。

(6) トーマス・ナオゲオルグス『商人あるいは審判』

ナオゲオルグスはプロテスタントの作家である。彼は1540年にバイエルンの生まれ故郷、シュトラウビングでこの作品を書いた。また、これは1595年にアウグスブルクで上演された。

この作品には副題が付いていて、そこには「宗教劇、ここでは使徒の教えと粗雑な教皇の教えとの違い、辛い良心の宗教上の闘いにおける感謝の違いが有益かつ／庶民の教育のために演じられ、再現されている」とある。つまり、カトリックとプロテスタントの教えを対比的に描き、プロテスタントの教えの方が有益であることを示し、かつ、庶民の教育に貢献することがこの作品の目的であることになる。

次の、劇の終わりに近い場面では、カトリックの修道士がまだ善き業に救いを見いだそうとしているが、主人公の商人がキリストによる救いを信じて、安らかに死を待っているのと対照的に描かれている。

FRANCISCANER

[…]

ich drumb nicht gar verzagen soll;
trag noch viel guter Werck mit mir,
die kann ich aufflegen dafür,
verhoff demnach noch guten Bscheid,
denn auch dies einig heilig Kleid
kann alle Sünd tilgen vorauß;
derhalben kommt mir noch kein Grauß,
mir wird noch nach Ehren gelohnt werden

フランシスコ会修道士

[…]

それでも弱気になってはいかん
私にはまだたくさん善き業がある
それを持ち出せばいいのだ
それでいい決定が望める
それにこの一枚の聖なるころも衣が
前もって罪はすべて消してくれよう
だからまだ恐ろしい気はしない
私がこの世で成したことに對して

für das, so ich than hab auff Erden.⁵⁰⁾

栄誉のご褒美があるかもしれん

KAUFFMANN

商人

[…]

[…]

Denn da ich meiner Schuld empfand
daß deren viel, thät auch verstand
auß Gottes Wort, daß vor dem Gricht
gute Werck rechtfertigten nicht,
thät ich Christum allein anschauen,
im Glauben allein ihm vertrauen;
dann auß Gotts Wort hab ich vernommen,
er sey darumb auff Erden kommen,
vom Vatter gsandt, der Sünder wegen,
daß er ihr Schuld auff sich thät legen,
weiln er sie zahlt, dafür gnug thut:
versöhnt den Vatter durch sein Blut.⁵¹⁾

私は自分の罪を感じ
神の言葉からその多くを理解しました
それは最後の審判では
善き業では義とされないということ
私はキリストだけを仰ぎ見て
信仰においてのみ彼を頼りとします
私が神の言葉からわかったことは
彼がこの世に来られたのは
父から送られ、罪人のために
彼らの罪を自分で被り
その対価を支払い
自らの血により父を宥めて下さった

(7) ヤスパー・フォン・ゲネブ『ホルムス (小さき人間)』

ゲネブはケルンの印刷業者で、ケルン大司教の認可と監督のもと、カトリック派の文書だけを出版することになっていた。また、彼は印刷業の傍ら自分でも著作をしていた。この作品は1548年にケルンで出版された。これは人気を博して、何回も版を重ねたり、繰り返し上演された。

この作品には以下の副題がついている。ここでも中世的なメモント・モーリの無常観がテーマになっていることがわかる。

Eyn schön Spyl / in wölchem menschlichs lebens vnsicherheit / vnd der welt

50) Wiemken (Hrsg.) (1965: 408)

51) Wiemken (Hrsg.) (1965: 411)

vntrew erzeigt wirt / vnd wie dem menschen im Todt niemant dann seyn
Dügd beystaht. Kurtzweilich vnd nützlich zu lesen.

人の生の不確かなこと / 世の不誠実なこと / 死ぬ人には徳しか側にいてくれないことが示される / すてきな芝居 / 読んで楽しく役に立ちます

次の序言では、カトリックの教えのとおり、人はいつ死ぬかわからないのだから、改悛が大切であると説いている。

Vorred

[…]

Drum sollt Ihr aus dem Spiel hie lernen,
mit Homulo zum Vatter kehren
und mit dem David zu Gott schreien,
so werden sich die Engel freuen;
denn Gott ist also mild und gut,
wann sich der Sünder bekehren tut,
will er der Sünd nimmer gedencken,
durch gebührlich Buß ihm den Himmel schencken.
Seht doch, wie schnell und geschwind
der Tod ein Menschen von hinnen nimmt,⁵²⁾

序言

[…]

皆さんにこの芝居から学んで欲しいのは
ホムルスと共に父のもとへ帰ること
ダビデと共に神を大きな声で呼ぶこと
さすれば天使たちが喜ぶでしょう
神はやさしく親切です
罪人が改心するならば
神はいつも罪を忘れてくださる
改悛によって天国を与えてくださる
しかしご覧なさい、なんとすばやく
死が人間を連れ去るさまを

以下に引用する主人公ホムルスの言葉では、主人公は当初、人は信仰によってのみ救われる、というルターの教えを、人は結局救われるのだから、どんな罪を犯しても平気だ、と言って茶化しているのである。

52) Wiemken (Hrsg.) (1965: 83-84)

HOMULUS

[…]

Kann uns der Glaub allein selig machen,
Narrren sinds, die Gotts Zorn groß achten,
darumb will ich nu nach meim Willen leben
und gläuben, daß mirs Gott werd vergeben.⁵³⁾

ホムルス

[…]

私たちは信仰だけで救われるのだから
神の怒りを過大に考えるのは愚かだ
だからこれから思うままに生きるのだ
そして神が赦してくれると信じるのだ

次の場面では、家族、友人、富、美、強健、五感、理性など皆、ホムルスのもとを去ってしまう。最後に残ったのは徳と徳の妹の信条だけである。

HOMULUS

Nun sehe ich, daß sie all uf ein Eis bauen,
die jemand anders denn der Dugt getrauen.
Ich sehe niemand dann mein Dugt bei mir stan;
o Bekenntnis, wollt Ihr auch von mir gan?

ホムルス

皆あてにならないものにすがっているのだ
徳の他に信頼するものは何もないの
に見るに、私のそばには徳しかいない
信条よ、あなたも私から去って行くのか

BEKENNTNIS

Nein, Homule, ich will dich nit begeben,
dein Seel sei erst im ewigen Leben.

信条

いいえ、あなたを見放すつもりはありません
あなたの魂が永遠の命に入らないうちは

HOMULUS

Danck hab, Bekenntnis, der tröstlichen Wort.
O weh, mein Herz muß brechen, ich fühl wohl,
ich muß fort.
Nehmt an mir Exempel all, die dies hört oder seht,
merckt, wie all Ding ohn mein Dugt von mir flieht.

ホムルス

心慰む言葉をありがとう、信条よ
ああ苦しい、私の心臓は張り裂けそうだ
私は行かなければならないようだ
観客の皆さん、私を例にして
徳の他、皆が逃げていく様を覚えておくのだ

53) Wiemken (Hrsg.) (1965: 101)

DUGENT

徳

Alles, was der Mensch hat lieb uf Erden, 人が愛するこの世のすべてのものは
verläßt ihn, wenn er zu der Erden soll werden. 人が地に帰るときには立ち去ってしまう
Schönheit, Starckheit, fünf Sinn und Verstand 美、強健、五感それに理性は
sind verschwunden wie ein Schein an der Wand; 壁に映った影のように消えてしまう
von all seinen Freunden ist keiner funden, 友人の誰一人として
der ihn tröstet ins Todes Stunden. 死に際に慰めるものはない
O Mensch, nimm hie ein Exempel und Spiegel, 人よ、これを例とし鏡とせよ
und laß dich die Welt nit länger betriegen, もはやこの世に欺かれてはならない
vertrau nit auf Starckheit oder einige Ding; 強さやその他のものに頼るでない
wenn der Tod kommt, verschwindts all wie der Wind.⁵⁴⁾ 死ぬ時はすべては風のように消え去る

最後に徳とその妹の信条が残る。すべてははかなく、消え去ってしまうという無常観は伝統的なカトリック的教えである。

また、またこの劇にはキリストの母、マリアが登場する。マリア崇拜、聖人崇拜は中世のカトリック世界ではさかんに行われた。

4. 5 宗教歌

歌は理性よりも感情に訴えるから、人を教化し、運動に動員するにはきわめて有効である。そのことをカトリック陣営もプロテスタント陣営も認識していたから、歌詞を作り、歌集として多く出版した。例えば、カトリックの歌集としてはイエズス会士、ヤーコプ・ビーダーマンが1627年に出版した『天の鐘 カトリック聖歌集』がある。プロテスタントのものとしては1640年にヨーハン・クリューガー（1598-1662）によって出版された歌集『歌における敬虔の実践』がある。これにはルターとともに宗教歌の作詞者として有名なパウル・ゲアハルト（1607-1676）の歌詞が多く含まれている。

54) Wiemken (Hrsg.) (1965: 155)

(1) カスパー・クヴェアハマー 「生のさなかに」

カスパー・クヴェアハマーはカトリックの作詞家である。この賛美歌の中の各連の最後にあるリフレインの「キリエエレイゾン（主よ、憐れみたまえ）」は祈りの文句である。カトリックでもプロテスタントでも使われるが、プロテスタント派ではドイツ語に訳したものを唱えることがある。

Mitten wir im Leben sind	生のさなかに
Mit dem Tod umbfangen:	死に囲まれている
Wen suchen wir, der Hilfe thu,	誰に助けを求め
Daß wir Gnad erlangen?	恩寵を得たらいいのか
Das bist du, Herr, alleine.	それは主よ、あなたしかいません
Uns reuet unser Missethat,	私たちは自分の罪業を悔いています
Die dich, Herr, erzürnet hat.	主よ、その罪業があなたを怒らせたのです
Heiliger Herre Gott,	聖なる主なる神よ
Heiliger starker Gott,	聖なる強い神よ
Heiliger barmherziger Heiland,	聖なる憐れみ深い救世主よ
Du ewiger Gott,	あなた、永遠の神よ
Laß uns nit versinken	私たちを落とさないでください
In des bittern Todes Not.	辛い死の窮地に
Kyrieelison.	主よ、憐れみたまえ

Mitten in dem bittern Tod	辛い死のさなかに
Schreckt uns dein Urteil:	私たちはあなたの判決を恐れます
Wer will uns aus solcher Not	誰がこのような苦しみから救って
Helfen zu der Seelen Heil?	魂の救済を与えてくれましょうか
O Herr, du bist alleine,	それは主よ、あなたしかいません
Der aus großer Gütickeit	慈悲深さから
Uns Beistand thut alle Zeit.	いつも私たちをささえてくれます

Heiliger Herre Gott,	聖なる主なる神よ
Heiliger starker Gott,	聖なる強い神よ
Heiliger barmherziger Heiland,	聖なる憐れみ深い救世主よ
Du ewiger Gott,	あなた、永遠の神よ
Laß uns nit verzagen,	私たちが弱音を吐かないように
So uns die Sünd thut nagen.	罪に苦しめられようとも
Kyrieelison.	主よ、憐れみたまえ
Mitten in der Feinden Hand	敵の手中に陥り
Thut die Forcht uns treiben:	恐怖にいたたまれない
Wer hilft uns, dann der Heiland,	救世主の他に誰が助けてくれよう
Daß wir ganz sicher bleiben?	安全にいられるには
Christe, du bists alleine	キリスト様、あなたの他にはいません
Denn du der gute Hirte bist,	あなたはよき羊飼いです
Der uns wohl bewahren ist.	私たちを守ってくれます
Heiliger Herre Gott,	聖なる主なる神よ
Heiliger starker Gott,	聖なる強い神よ
Heiliger barmherziger Heiland,	聖なる憐れみ深い救世主よ
Du ewiger Gott,	あなた、永遠の神よ
Laß uns friedlich sterben,	穏やかに死ぬるようにしてください
Mach uns deines Reichs Erben.	私たちをあなたの国の ^{あとつぎ} 後継に
Kyrieelison. ⁵⁵⁾	主よ、憐れみたまえ

(2) エラスムス・アルベルス「神は福音を」

アルベルスはプロテスタントの作家である。「神は福音を」は「福音」をキー

55) Wolff (? : 6-7)

ワードにしている点ではプロテスタント的である。ただ、最後の審判を待つという内容は悲歌とも言うべきものである。

Gott hat das Evangelium	神は福音をくださった
Gegeben, daß wir werden fromm:	私たちが敬虔になるように
Die Welt acht solchen Schatz nicht hoch,	世の中はこの宝を尊重しない
Der mehrer Teil fragt nichts darnach,	たいていの人はこれを求めない
Das ist ein Zeichen vor dem Jüngsten Tag.	最後の審判が近づいた ^{しるし} 徴である

Man fragt nichts nach der guten Lehr,	人はよき教えを求めない
Der Geiz und Wucher nu viel mehr	それよりも貪欲や利得が
Hat überhand genommen gar,	優先されるようになり
Noch sprechen sie: „Es hat kein Fahr.“	まだ大丈夫だと言っている
Das ist ein Zeichen vor dem Jüngsten Tag	最後の審判が近づいた徴である

[…]

Wo bleibt die brüderliche Lieb?	兄弟愛はどこへ行ったのか
Die ganze Welt ist voller Dieb,	世界中が ^{ぬすつと} 盗人だらけ
Kein Treu noch Glaub ist in der Welt,	世には忠誠心も信仰もない
Ein jeder spricht: „Hett ich nur Geld!“	誰もが言うことは「金が欲しい!」
Das ist ein Zeichen vor dem Jüngsten Tag.	最後の審判が近づいた徴である

Die Welt will ihr nicht lassen wehrn,	この世は何をも憚らない
An Gotts Wort will sich niemand kehrn,	神の言葉は誰も見向きもしない
Sie haben nichts gelernet mehr	人はもはや何も学ばなかった
Denn immer fressen, saufen sehr:	ただ暴飲、暴食するばかり
Das ist ein Zeichen vor dem Jüngsten Tag.	最後の審判が近づいた徴である

[…]

Darumb kumm, lieber Herre Christ!	ですから来て下さい、キリスト様
Das Erdreich überdrüssig ist	地上の国はさんざんです
Zu tragen solche Hellebrend,	このような地獄は耐えられません
Drumb machs ein mal mit ihn ein End,	いちどそれらにけりをつけ
Und laß uns sehn den lieben Jüngsten Tag. ⁵⁶⁾	最後の審判を迎えさせてください

5. 結論

以上の考察を結論としてまとめると以下ようになる。

- 1) 近世に入ると交通や通信の進歩に伴って、産業や商業が発展し、社会の地域的および階層的流動化が大規模なものになった。このことが情報を文書の形で記録する必要性を生じさせ、文書の重要性が高まった。
- 2) 文書の重要性が高まり、文書の利用が増えたことによって、読み書き能力を有する人材が求められた。その為、そのような人材を養成する学校や塾が設立されて、一般庶民の識字率が向上した。
- 3) 近世に入ると農民や市民などの庶民層も経済的な力を蓄え、社会的に上昇しつつあったので、さまざまな知識を習得して、はっきりと自己主張をするようになった。
- 4) 近世に入って廉価な紙の大量生産が行われ、活字印刷術が発明されて、安価な文書の大量印刷が可能になった。このことが文書をさまざまな分野に利用し、また、広範囲に頒布することを促進した。その際、Flugschrift（リーフレット、パンフレット）と呼ばれる、1から8枚のふつうは綴じていない文

56) Wolff (? : 33-35)

書が大量に印刷して使われた。

- 5) 中世では重要な文献はラテン語で書かれていた。近世に入ると社会状況が変化したため、新しい事態に対応して文書はドイツ語で書かれるようになった。
- 6) ルターの宗教改革によってプロテスタント勢力が勃興したため、既成の体制であるカトリック側も体制を立て直す必要に迫られた。
- 7) 近世ドイツの宗教改革運動にあってはカトリックの聖職者、作家もプロテスタントの聖職者、作家も競い合って庶民の教化に努めた。庶民の側も聖書などの知識、論理的思考、討論技術などの獲得に努めた。
- 8) カトリックの聖職者、作家もプロテスタントの聖職者、作家も庶民に向かって自らの信ずるところを伝えることに努力した。また、それぞれ相手側の教義を論破し、自らの教義の優越性を示すことによって、庶民を自陣営の味方につけるようにすることもあった。
- 9) 演劇では「放蕩息子」や「エブリマン」などの一般によく知られた素材をカトリックの作家もプロテスタントの作家も競って演劇化し、庶民に宗教観の差違を明確な形で示そうとした。
- 10) 庶民の教化の目的で、口頭による教化だけでなく、さまざまな種類の文書が使われた。それには、説教、カテキズム、対話文、風刺詩、寓話、演劇、宗教歌などがあった。
- 11) 口頭による教化のためには、説教、演劇、宗教歌がある。しかし、これらも文書の形で残されて、集会などでの朗読に利用されたり、あるいは個人的な黙読による読書に利用された。
- 12) 上の場合とは反対に、カテキズム、対話文、風刺詩、寓話などの書かれたテキストとしての文書であっても、庶民の識字率はまだまだ低かったから、個人による黙読よりも、家族、集会などの大勢の前で朗読されることの方が多かった。また、時には節をつけて歌われることもあった。
- 13) 風刺詩、寓話、演劇、宗教歌などは近世においてはまだ韻文で書かれることがほとんどであった。耳に入りやすく、記憶しやすいからである。
- 14) 説教、カテキズム、対話文、宗教歌とは異なって、風刺詩、寓話、演劇など

は教育・教化の意味の他に、娯楽性もあった。

- 15) 文書はラテン語で書かれたり、ラテン語が引用されたりする場合があった。ラテン語がわかるわからないに関係なく、権威付けの意味があった。
- 16) カトリックの聖職者、作家などはラテン語を使うことが多かった。これは後進の若者のエリート教育の一環であった。他方、プロテスタントの聖職者、作家などはラテン語の文献でもドイツ語に翻訳し、また、ドイツ語で著作をして、庶民にも理解できるように努めた。
- 17) プロテスタントの聖職者は庶民の教化に熱心であった。カトリックは特定のエリート教育を中心にした。また、両者は共に若者や後進の教育に有効な手段として、学校における演劇を重視した。
- 18) 文書の印刷、出版、著者の創作活動、演劇の上演などは印刷所の所在地、著者の活動地域、芝居の上演地がカトリック勢力の強いところにあるか、プロテスタント諸侯の領地や新教化された都市にあるかで大きく左右された。しかし、その状況は頻繁に変化する場合もある。

原典資料、参考文献

- 1) Albert, F.R. (1896): Die Geschichte der Predigt in Deutschland bis Luther. III. Teil: Die Blütezeit der deutschen Predigt im Mittelalter 1100-1400. Gütersloh: C. Bertelsmann
- 2) 浅野啓子, 佐久間弘展 (編著) (2006): 教育の社会史—ヨーロッパ中・近世. 知泉書館
- 3) Bentzinger, R. (1992): Untersuchungen zur Syntax der Reformationsdialoge 1520-1525. Ein Beitrag zur Erklärung ihrer Wirksamkeit. Berlin: Akademie
- 4) Berger, A. E. (Hrsg.) (1938): Lied=, Spruch= und Fabeldichtung im Dienste der Reformation. Leipzig: P. Reclam (Deutsche Literatur. Reihe Reformation Bd. 4)
- 5) Berger, A. E. (Hrsg.) (1935): Die Schaubühne im Dienste der Reformation. Erster Teil. Leipzig: P. Reclam (Deutsche Literatur. Reihe Reformation Bd.

- 5)
- 6) Besch, W. et al. (1998): Sprachgeschichte. Ein Handbuch zur Geschichte der deutschen Sprache und ihrer Erforschung. Teilbd. 1 Berlin: W. de Gruyter
- 7) Besch, W./ Wolf, N. R. (2009): Geschichte der deutschen Sprache. Berlin: E. Schmidt
- 8) Braune, W. (Hrsg.) (1892): Die Fabeln des Erasmus Alberus. Halle a. S.: M. Niemeyer
- 9) シャルティエ, R./ カヴァッロ, G. (編), 田村毅他 (訳) (1995/2005): 読むことの歴史—ヨーロッパ読書史. 大修館書店
- 10) Dithmar, R. (Hrsg.) (1995): Luthers Fabeln und Sprichwörter. Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft
- 11) Engelsing, R. (1973): Analphabetentum und Lektüre. Stuttgart: J. B. Metzler
- 12) Filser, H./ Leimgruber, S. (Hrsg.) (2003): Petrus Canisius Der Große Katechismus Summa doctrinae christianae (1555). Regensburg: Schnell und Steiner
- 13) Fleischer, W. et al. (Hrsg.) (2001): Kleine Enzyklopädie Deutsche Sprache. Frankfurt a. M.: P. Lang
- 14) Flemming, W. (Hrsg.) (1930): Das Ordensdrama. Leipzig: P. Reclam (Deutsche Literatur Reihe Barock: Barockdrama Bd. 2)
- 15) Frenzel, E. (1962): Stoffe der Weltliteratur. Ein Lexikon Dichtungsgeschichtlicher Längsschnitte. Stuttgart: A. Kröner
- 16) Freytag, G. (Hrsg.) (1980): Flugschriftensammlung: vollständige Wiedergabe der 6265 Flugschriften aus dem 15. bis 17. Jahrhundert sowie des Katalogs von Paul Hohenemser auf Microfiche / Stadt- und Universitätsbibliothek. Frankfurt a. M.: K.G. Saur
- 17) Fuhrich-Leisler, E. et al. (1978): Jedermann in Europa. Vom Mittelalter bis zur Gegenwart. Eine Ausstellung der Max Reinhardt-Forschungs- und Gedenkstätte. Zusammenstellung der Ausstellung und Bearbeitung des Kata-

logs. Salzburg

- 18) ジルモン, J.-F. (平野隆文訳) (1995/2005): 宗教改革と読書. In: シャルティエ, R./ カヴァッロ, G. (編), 田村毅他 (訳) (1995/2005) pp. 285-331
- 19) Grubmüller, K. (Hrsg.) (1994): Nürnberger Prosa-Äsop. Tübingen: M. Niemeyer
- 20) Haas, W. (Hrsg.) (1989): Fünf Komödien des 16. Jahrhunderts. Bern: P. Haupt
- 21) Hartweg, F./ Wegera, K.-P. (2005): Frühneuhochdeutsch. 2. Aufl. Tübingen: M. Niemeyer
- 22) ジュリア, D. (平野隆文訳) (1995/2005): 読書と反宗教改革. In: シャルティエ, R./ カヴァッロ, G. (編), 田村毅他 (訳) (1995/2005) pp. 333-385
- 23) Kindermann, H. (1959a): Theatergeschichte Europas. II. Band Das Theater der Renaissance. Salzburg: O. Müller
- 24) Kindermann, H. (1959b): Theatergeschichte Europas. III. Band Das Theater der Barockzeit. Salzburg: O. Müller
- 25) Köhler, H.-J. et al. (Hrsg.) (1978-87): Flugschriften des 16. Jahrhunderts. Switzerland: Inter Documentation Co.
- 26) Köhler, H.-J. (1981): Flugschriften als Massenmedium der Reformationszeit. Beiträge zum Tübinger Symposium 1980. Stuttgart: Klett-Cotta
- 27) Könniker, B. (1975): Die deutsche Literatur der Reformationszeit. München: Winkler
- 28) Lenk, W. (Hrsg.) (1968): Die Reformation im zeitgenössischen Dialog. 12 Texte aus den Jahren 1520 bis 1525. Berlin: Akademie
- 29) Leyser, H. (Hrsg.) (1838/1970): Deutsche Predigten des XIII. und XIV. Jahrhunderts. Quedlinburg und Leipzig: G. Basse (Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft)
- 30) D. Martin Luthers Werke. Kritische Gesamtausgabe (Weimarer Ausgabe) Weimar: H. Böhlau 1964-1997 Bde 30, 52

- 31) 前川和也 (編著) (2001): コミュニケーションの社会史 (MINERVA 西洋史ライブラリー 49) ミネルヴァ書房
- 32) メイ, J. L (著), 小山亘 (訳) (2005): 批判的社会語用論入門: 社会と文化の言語. 三元社
- 33) 松田智雄 (編) (1995): ルター. 中央公論社 (世界の名著 23)
- 34) Mattheier, K. J. (1998a): Allgemeine Aspekte einer Theorie des Sprachwandels. In: Besch, W. et al. (1998) pp. 720-730
- 35) Mattheier, K. J. (1998b): Sprachwandel und Sprachvariation. In: Besch, W. et al. (1998) pp. 768-779
- 36) Mattheier, K. J. (2001): Sprachvarietäten. In: Fleischer, W. et al. (Hrsg.) (2001) pp.351-363
- 37) 成瀬治, 山田欣吾, 木村靖二 (編) (1997): ドイツ史 1 先史～1648年 (世界歴史体系) 山川出版
- 38) Polenz, P. v. (2000): Deutsche Sprachgeschichte vom Spätmittelalter bis zur Gegenwart. Bd. I: Einführung, Grundbegriffe, 14. bis 16. Jahrhundert. 2. Aufl. Berlin: W. de Gruyter
- 39) 佐久間弘展 (2006): 14～16世紀ドイツ市民の初等教育. In: 浅野啓子, 佐久間弘展 (編著) (2006) pp. 101-124
- 40) 佐々木博光 (2001): ラテン語とドイツ語のはざまで - 生存闘争のなかの人文主義. In: 前川和也 (編著) (2001) pp. 351-378
- 41) Schweckendiek, A. (1930): Bühnengeschichte des verlorenen Sohnes in Deutschland. I. Teil (1527-1627). Leipzig: L. Voss
- 42) Scribner, R. W. (1981): Flugblatt und Analphabetentum. Wie kam der gemeine Mann zu reformatorischen Ideen? In: Köhler, H.-J. (1981) pp. 65-76
- 43) Thomke, H. (Hrsg.) (1996): Deutsche Spiele und Dramen des 15. und 16. Jahrhunderts. Frankfurt am Main: Deutscher Klassiker Verlag (Bibliothek deutscher Klassiker 136)
- 44) ヴァーシューレン, J. (著), 東森勲 (監訳), 五十嵐海理他 (訳) (2010): 認知

と社会の語用論: 統合的アプローチを求めて. ひつじ書房

- 45) Wiemken, H. (Hrsg.) (1965): Vom Sterben des reichen Mannes. Die Dramen von Everyman, Homulus, Hecastus und dem Kauffmann. Bremen: C. Schünemann
- 46) Wolff, E. (?): Das deutsche Kirchenlied des 16. und 17. Jahrhunderts. Stuttgart: Union Deutsche Verlagsgesellschaft (Deutsche National-Literatur 31. Bd.)